

辞書の活用指導について考える

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/37099

辞書の活用指導について考える

金沢大学

折川 司

一

意味の分からない語句に出会ったとき、子どもたちはどうするか。

小学校三年生以上に尋ねると、即座に「辞書を引く」と返してくる。仕事柄様々な校種の学生と接する機会があるが、彼らの口からは決まって辞書活用という解決策が示される。彼らの生活には、国語辞典や漢和辞典を引くという行為が浸透・定着しているであろう。実際、「こんなにも引いています」と、膨大な数の付箋紙が貼られて分厚くなった辞書を誇らしそうに見せてくれる小学生も多い。

しかしながら、私たちは常に辞書を持ち歩いているわけではない。そこで、辞書が手元にならない場合はどのように解決するのかと問うと、彼らは皆一様に困った

表情になる。「辞書が置いてある図書室に行く」「家に帰ってから辞書を引く」と返されることもある。時に「見なかったことにする」という強者もいる。

最近では、スマートフォンの中に入っている辞書アプリを使えばいいから問題ないという学生もいるが、外出先などで一々起動させ、入力して調べるといのは、確実ではあるが非効率的で、これも日常における実際的な対応とは思えない。

二

辞書に対して信頼感をもち、その活用を常態化している様子は一面喜ばしいことであろう。しかし、彼らの頭には「意味の分からない語句との遭遇→辞書活用」

という強力なフローチャートだけが確立しているかのようでもある。取り敢えず人に聞いてみるという柔軟さもなく、つまりは辞書がなければ立ち往生してしまうであろう脆弱な実態が透けて見える。

意味の分からない語句に出会ったら、迷わず辞書を引く。この極めて正当な行為の陰で、私たちがうっかり見落としている要素はないか。

輿水実氏は、すぐに辞書を引かせようとする指導を否定的にとらえ、辞書活用の前に「その語句をよく見ること、その語句をその文脈で考えること⁽¹⁾」に取り組むことが重要であると強調している。一九六六年の論考である。

また、大熊徹は「意味の分からない言葉については、まず、文脈の中の意味を考え、次に、辞書を引き、幾つかある語釈の中から文脈に最も適した意味を捉える。」⁽²⁾と述べている。

両者に共通しているのは、「まず文脈の中の意味を推測する」という初期対応の重要性である。最終的には辞書で確認していくとしても、まずは前後の文脈などから語義を推しはかってみる冗長さで

ある。こうした推測する姿勢と力こそが、実生活に即したものととして、辞書を引くのと同等に、もしくはそれ以上に重要なのではないだろうか。

三

秋口に、その頃読んでいた、ある小説の中にあった熟語の意味を、ちようど来室したゼミ生に質問してみたことがある。「寸毫」という言葉である。

素気なく、「わかりません。見たことありませんね。」と言うので、

本会は神を寸毫も認めない。入会せんとする者は無神論の証拠を示さねばならぬ。

という前後の文章を示して、あらためて質問した。すると、「ああ、この流れの中で考えるのならば、『少しも』とか『わずかも』というような意味じゃないですか。」と答える。

理由を聞くと、「『くもくもない』にびつたりくるのはそんな感じの言葉ですし、『無神論の証拠を示さなければならぬ』に繋がる展開から考えても、そうかなと。それに『寸』という字が付いているから、『ほんの少し』という意味を含む言葉で

はと思ったのです。」と続けてきた。

「妥当かどうかを、ちよつと辞書で確認したいですね。」と要求してきたので国語辞典を渡すと、「きわめてわずかなこと」と載っていたようである。ご存じのように、「毫」も、「寸」と同様に「わずか」という意味をもっている。

四

辞書を引き、付箋紙を貼り付けていくという実践は、石川県内でも長く流行しているようである。調べた見出し語の上に付箋紙を貼り、検索の履歴を目に見える形で残していくという工夫は、子どもたちの日常に辞書を引き寄せ、その活用意欲を持続させる上で有効なものである。それは、分厚くなつた辞書を差し示す彼らの満足げな表情も物語っている。

しかし、もし付箋紙の数を増やすことが子どもたちの中で目的化され、辞書に一足飛びに向かうことだけに価値がおかれているような教室になってしまっているのであれば、それは残念なことである。本来、辞書の活用指導における付箋紙の貼付は、そのような浅薄な実践を目指し

てのものではないはずである。

辞書活用に至るステップがしっかりと経験され、推測する力が子どもたちに身につけていければ、彼らは言海でより豊かに学ぶことができるに違いない。辞書もまた、文脈などから推測した内容を確認したり、推測した内容をもとに適切な語義を選択したりする場として活用されるようになるであろう。大熊のいう「辞書本来の使い方」である。そうなれば、辞書が傍にないと身動きがとれないなどという冒頭のようなひ弱さは次第に薄れていくと思うのは、少々安直であろうか。

興水が先の論考を出してから、今日に至るまでに半世紀弱が過ぎていく。国語教室を見渡しているの雑感を述べてみた。

(1) 興水実「語句指導の改造」『教育学国語教育』九七号、一九六六、明治図書

(2) 大熊徹「作り手側の論理から考察する辞書活用の在り方」『教育学国語教育』六三二号、二〇〇三、明治図書